

中山道広重美術館の民間連携

中山道広重美術館では、平成29(2017)年から「スポンサー制度」を導入し、現在毎週水曜日を「フリーウエンズデー^{※1}」、毎週金曜日を「フリーライダー^{※2}」と称して、来館者の皆さまに無料で展覧会をご覧いただいています。

この制度は、株式会社ユニクロがニューヨーク近代美術館(MoMA)のスポンサーとなり、毎週金曜日の午後4時から8時までの入館料を無料にするプログラム「ユニクロ・フリー・ライダー・ナイト」を参考にしています。美術館は、スポンサー企業に特定の開館時間帯の観覧料相当額を負担していただくことで当該時間帯の来館者の観覧料を無料とし、より多くの人々に対し美術館に気軽に足を運べる機会を提供。一方、スポンサー企業に対しては、館内掲示や当館の広報活動の中で積極的にPRし、企業のイメージ向上に努めます。平成27年の制度開始時、当館が調べた限りでは、企業や個人の支援により美術館の入館料を無料とする制度を有する美術館は国内には見当たらず、このような取り組みは非常に珍しいものでした。

当館では、火～金曜日の開館時間(午前9時半～午後4時半)を2時間半=1単位として12単位に分け、1単位からスポンサーを募集しています^{※3}。もちろん複数の時間帯でスポンサーになっていただくことも可能です。現在までに地元企業を中心とした8社がスポンサー制度にご参加くださり、今年度は恵那市や中津川市に本社を置く6社によって、水曜日と金曜日の観覧料が終日無料となっています。

美術館、企業、来館者がそれぞれにメリットを享受する「三方よし」を目指す本制度ですが、課題もあります。水曜日と金曜日の来館者が増える一方、それ以外の平日では来館者が減少している点もその一つです。また、スポンサー契約は1年ごとの更新であるため、次の1年間も引き続きご支援いただけるよう企業に働きかけたり、新たにスポンサーになっていただだけそうな企業をリサーチしたりすることも必要です。

当館のスポンサー制度は、本来来館者に支払ってもらう観覧料を企業に肩代わりしていただく形で当館の活動を支援していただくものです。一般的な寄付やクラウドファンディングとは異なりますが、美術館と民間企業の連携の事例の一つとして、当館の取り組みをご紹介させていただきました。

- ※1 令和4(2022)年4月～現在
- ※2 平成29(2017)年10月～現在
- ※3 1日は3単位に分けられる。



フリーライダーズponsor協定締結式の様子
(平成29(2017)年10月5日)



フリーウエンズデーSponsor協定締結式の様子
(令和4(2022)年3月31日)



フリーライダー実施日の美術館入口

なお、募集要項の詳細は中山道広重美術館ウェブサイト(<https://hiroshige-ena.jp>)の「スポンサー制度について」を参照

(中山道広重美術館 中村 香織)

妻木の熊谷吉兵衛の調査研究

はじめに

土岐市美濃陶磁歴史館において、2022年11月19日から2023年2月26日にかけて、幕末から明治前半期にかけて活躍した商人熊谷吉兵衛(1814～1890)を取り上げた企画展『妻木の熊谷吉兵衛－美濃の大陶商「西浦屋」を支えた人－』を開催しました。本稿では、企画展開催に至るまでの調査研究の過程をご紹介します。

熊谷吉兵衛とは

熊谷吉兵衛は、文化11年に土岐郡妻木村(現土岐市妻木町)の名主で、製陶業を営む家に生まれ、天保元(1830)年に多治見の陶器商「西浦屋」へ勤めに出ます。ちょうど東濃地方では磁器生産が始まり、大都市江戸での需要により活況を呈していた頃でした。

この頃の西浦屋は、当主円治(2代)が天保6(1835)年に尾張藩の出先機関「美濃焼物取締所」取締役に就任し、美濃焼の販売を取りまとめる公的な立場にありました。さらに、弘化3～4(1845～46)年には、大阪と江戸にそれぞれ支店を構え、多治見本店を含めた3店舗で全国へ美濃焼を流通させる販売網を構築します。吉兵衛は江戸支店支配人を任せ、やがて大番頭として3店舗を差配する立場となり、吉兵衛なしに西浦屋は語れないといっても過言ではない存在になりました。

もう一つの視点として、吉兵衛が信奉した学問「石門心学」があります。石田梅岩(1685～1744)を開祖とする石門心学は「勤勉・儉約・正直」を旨とする生き方を説く学問で、江戸時代に商人を中心に全国的にひろまりました。吉兵衛は江戸の心学講舎「参前舎」に所属して心学を極め、その思想を西浦屋の経営手法にも取り入れます。西浦屋を隠居し名を「東洲」と改めた吉兵衛は、明治初年から晩年まで参前舎舎主を務めながら、心学を説く書物の出版や、故郷妻木での心学講舎開設など、石門心学の普及に心血を注ぎました。

展覧会を開催するまでの道のり

熊谷吉兵衛は、幕末から明治への時代の転換期に生きたユニークな人物ですが、これまで、その存在はほとんど知られていませんでした。

私自身が吉兵衛に注目するようになるのは、



伝熊谷吉兵衛肖像写真

明治時代初頭(19世紀) 個人蔵

子孫宅に吉兵衛肖像と伝わるもの。写真枠に「山谷堀和田」の印字があることから、現東京都台東区辺りで撮影か。

だいたい前のこととなります。始まりは、東濃地方の学芸員らによる私的な勉強会「市史を読む会」の活動にあります。2007年に8人ほどのメンバーで発足、『多治見市史窯業史料編』(1976年)に掲載された古文書翻刻を順番に読み、分析する勉強会を行ってきました。勉強会は、コロナ禍での中断もありながら、658ページにおよぶ翻刻を2020年7月に約13年かけて完読しました。月1～2回ほどのペースで一つずつ読解していく地道な作業でしたが、この成果は、メンバーそれぞれの中に近世美濃窯業史の基礎的な知識として積み重ねられ、各自の仕事に活かされていることを実感しています。

窯業史料編の核となっているのが「西浦家文書」で、江戸後期の美濃焼の生産流通に関する情報が詰まった良質の古文書群です。1970年代の市史編纂に伴い、西浦家によって古文書群が公開されたことにより、文献による近世美濃窯業史研究は飛躍的に進展しました。

私自身は、西浦家文書を読み進めるうち、吉兵衛と主人円治との深い関わりがうかがえる文書や、吉兵衛自身が記した多くの文書など、西浦屋の中で際立った吉兵衛の存在に目が留まりました。文書から浮び上がるその姿は、西浦屋繁盛のため、江戸で役人と政治的な駆け引きを行う狡猾ともいえる商人としての一面、一方で奉公人の少年の大病を案じたり、石門心学に専念するために隠居を願い出たり(却下されます)と、その人間性がにじみ出るような一面が印象的でした。

そして、2014年、私は多治見市から転職し現職に就いた際、『土岐市史』(1971年)で吉兵衛の存在に全く触れられていないことに気が付きました。土岐市域の出身ながら、多治見市域で勤務したため、現在の行政区域のはざまに埋

もれてしまったことが要因と考えられ、いずれ吉兵衛展を開催し、土岐市の人たちに知ってもらいたいと考えました。

もう一つ、転職により、同じ美濃焼産地ながら研究地域の軸足がずれたことによる私自身の変化がありました。これまで、近世美濃窯業史は、公的な立場にあった西浦家の史料を中心に綴られてきた側面があったことは否めず、私自身の見方にも偏りがありました。

しかし、少し視野を広げてみると、まとまった形で公表されていないだけで、地域には多様な資料が残されており、西浦の勢力が及ばない私領の生産や西浦に対抗する商人と生産者の動きなど、それまでとは異なった美濃焼産地の姿が浮かび上がってきました。

吉兵衛も下郷妻木氏領で窯業を営む家に生まれ、支配者の異なる天領の西浦屋に勤めるという、複雑な支配領域の美濃焼産地を生きた人物です。吉兵衛について調べることで、近代に向かって拡大する美濃焼産地の姿の一端が見えてくるのではないかと考えるようになりました。

吉兵衛展を企画する

こうして、いつか吉兵衛展を開催したいという密かな野望を胸に、細々と個人的に資料を収集するところから開始しました。

まずは「吉兵衛」の視点で『多治見市史』を読み直し、情報を洗い出すこと。そして、妻木で郷土史を研究されている黒田正直氏(妻木八幡神社宮司)から吉兵衛関連の資料の提供を受け、分析を加えることから始め、「石門心学」関連資料の収集へと調査を広げていきました。

企画展のスケジュールが固まり、会期の一年程前からは、吉兵衛の子孫宅を調査させていただき、古文書や陶磁器類など思った以上に多くの資料が残っていることが判明しました。多くの人のご協力もあって、芋づる式に資料がみつき、山形県に吉兵衛が師匠とともに石門心学普及の旅をした紀行文(鶴岡市郷土資料館蔵)、広島大学図書館に心学講舎「参前舎」関連文書の写しなどの存在も判明しました。

集まった資料が多すぎ、とても展覧会開始までに整理と分析が追いつきませんでした。そのことも踏まえ、今回の企画展では、歴史に埋もれた吉兵衛の存在を知ってもらうこと、吉兵衛を通して時代の転換期の美濃焼産地の様子を知ってもらうことをねらいとしました。

また、当館では、通常、作品写真を収録する図録を発行していますが、今回は家に持ち帰っ



土岐市美濃陶磁歴史館2022年度企画展「妻木の熊谷吉兵衛」の小冊子および展示に用いた漫画パネル

てじっくり読んでもらえる「読み物」として小冊子を制作しました。冊子の構成は大きく二本立てで、一つは江戸時代の複雑な美濃焼の生産流通構造を図と文章でまとめた部分、もう一つは吉兵衛と石門心学の関わりを追った部分とし、年表には典拠とした参考文献も掲載し、展覧会終了後も、個人の学習や研究のテキストとして役立てられることを企図しました。

一方、展示では、複雑な時代背景を文章で全て伝えようとする、何枚ものパネルを提示することになり、観る側が疲弊すると思われるため、ポイントを漫画のパネルで表現することを試みました。漫画はわかりやすいと好評で、一つの試みとして成功したと思っていますが、文章パネルよりも受け手側のイメージが固定化されやすく、展示側の一面的な見方を押し付けてしまうのではないかという危惧を感じていたことも事実です。漫画やイラストのパネルについては、今後も試行錯誤しながら、よい提示方法を考えていきたいと思っています。

展覧会を終えて

今回の展覧会は、ほとんど知られていなかった吉兵衛の存在や石門心学に光を当てたことをひとまずの成果とし、今後も吉兵衛を追いかけて、資料を丹念に読み解き、美濃焼産地の様相を明らかにしていきたいと考えています。

展覧会準備の過程で集まってきた多くの資料については、現在も整理を続けています。展覧会終了後に、業務の中で資料整理の時間を確保することは難しい場合が多いですが、地域博物館の学芸員として、調査研究の到達点は資料を資源化し公表することに位置付けたいと考えています。資源化した資料が活用され、さらなる研究が積み重ねられ、厚みのある地域史が描き出されていくことが学芸員としての喜びです。

(土岐市美濃陶磁歴史館 春日 美海)

令和5年度 岐阜県博物館協会 通常総会

期 日：令和5年6月7日(水)

会 場：岐阜県博物館

マイミュージアム棟3階けんぱくホール

参加者：103名(委任状を含む)

令和5年度通常総会が、6月7日に岐阜県博物館マイミュージアム棟3階けんぱくホールにて開催されました。

通常総会における議題は

- ① 役員の補充について
- ② 令和4年度事業報告及び収入支出決算の承認について
- ③ 令和5年度事業計画及び収入支出予算の決定について

の3議題で、賛成多数によりすべて承認可決されました。

また、令和5年度岐阜県博物館協会表彰については、齋藤美術館の齋藤仁司氏が受賞されました。

令和5年度 岐阜県博物館協会 会員研修会 「新博物館法から考える 博物館ネットワーク」

期 日：令和5年6月7日(水)

会 場：岐阜県博物館

マイミュージアム棟3階けんぱくホール

講 師：佐々木 秀彦氏

(東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京)

参加者：40名

昨年、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により通常総会後の県民文化講演会の代替として開催した会員研修会を、今年も開催しました。講師には東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京の佐々木秀彦氏をお招きし、「新博物館法から考える博物館ネットワーク」をテーマに、ご講演いただきました。

講演では、博物館法改正に伴い、文化芸術基本法の精神に基づくが定められ、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他各関連分野における施策の連携を図るよう配慮していく必要があると確認されました。実際に先行して取り組んでいる全国の博物館を例に挙げて、文化観光の視点で博物館運営を図ることや地域

資料の充実を図ることの重要性を示していただき、博物館運営の在り方を振り返ることができました。今後、博物館同士のネットワークを形成していくために、協会としての連携をさらに強化していく必要性が示されました。

また、第2部には情報交換会と称して、

- ① 博物館資料保存の課題について (もの部会)
- ② 岐阜県博物館界の先達へのインタビューについて(ひと部会)
- ③ 博物館協会ホームページの使い方のコツについて(こと部会+事務局)
- ④ 東海3県研修会(令和4年12月7日)についての4点について、各専門部会から報告がありました。講演終了後には、講師や会員間での活発な意見交換が行われ、人が集まって交流することの強みを感じました。



(岐阜県博物館協会事務局 間宮 千尋)

令和4年度 東濃ブロック部会 会員研修会 「博学連携を考える」

日 時：令和5年2月17日(金)
15:00～17:20

場 所：岐阜県現代陶芸美術館

参加者：13名

講 師：澤田 恵 氏

東濃ブロック部会員の知識向上、情報交換等のため、多治見市立昭和小学校教諭で岐阜県小中学校教育研究会図画工作・美術部研究部長でもある澤田恵氏を講師にお招きし、学校教育の現状や博学連携の事例などをお話しいただくとともに、部会員3名から各施設での取り組みについて事例報告をしていただきました。

澤田氏からは、①生の体験・感動のため博物館利用を推進したいと考えているが、大人数の入館に対応できるか、バス利用は可能か、昼食場所はあるか、体験活動は従事しているか、などを課題と認識している。②博物館側も教科書の内容を把握し、カリキュラムにあった適時のイベント開催に努めてほしい。③子どもたちが施設や企画を事前に調べるため、ホームページに子供向けの検索・紹介ページを掲載してほしい。④学校に情報提供を行う場合は、次年度のカリキュラム作成に間に合わせるため1～2月までに行ってほしい。また情報提供は校長会・教頭会等で複数回行ってほしい。などの留意点についてご教示いただきました。

事例報告では、多治見市文化財保護センターから「各小学校への民具展示室設置や収蔵品貸出について」、土岐市美濃陶磁歴史館から「ふるさと発見体験事業の普及・工夫について」、現代陶芸美術館から「学校・美術館・作品・作家等とのネットワークづくりについて」を報告していただき、その後は座談会へと移りました。

座談会では、参加者全員が澤田氏や報告者への質問、また意見等の発言を行い、各取り組みへの見識を深めました。

東濃ブロック部会では、今後も同様の研修を継続する予定です。他ブロックからの参加も歓迎しますので、詳細は協会ホームページなどで随時ご確認ください。

(瑞浪市陶磁資料館 砂田 晋司)

令和4年度 第3回もの部会 「木曾川文化史料館見学」

日 時：令和5年3月7日(火)
14:00～16:00

場 所：木曾川文化史料館

参加者：7名

第3回もの部会は、会員の見学会を兼ねて木曾川文化史料館で開催されました。

木曾川文化史料館は、各務原市歴史民俗資料館が管轄する、川島会館4階に所在する施設です。1983年、「川島町ふるさと史料館」として開館しました。川島町と各務原市の合併の後リニューアルを行い、2011年に現在の名称になりました。

館内には、常設展示室・民俗資料室・空襲資料室の3つの展示室があります。2018年にオープンした空襲資料室では、1945年の各務原空襲について、爆弾投下位置を示したパネルや爆弾模型、各務ヶ原飛行場に関する資料などを展示しており、県内では珍しい施設です。



木曾川文化史料館空襲資料室の見学の様子

歴史民俗資料館の収蔵庫としての役割も担っており、古文書などが保管されていますが、収蔵庫に空調設備がなく、温湿度管理に課題があります。古い施設ではありますが、今後もこまめな清掃や定期的な虫干しなどによって、資料にとって適切な環境が維持できるように務めていきます。

見学会のあとの部会では一昨年度購入した保存備品・消耗品を仕分けし、岐阜県博物館(中濃・設置済)、各務原歴史民俗資料館(岐阜地区)、岐阜県現代陶芸美術館(東濃)、西濃1、飛騨1へ配布することとしました。

(各務原市歴史民俗資料館 長谷 健生)

「博物館が連携するということ ～岐阜県博物館協会の事例」

(全国博物館長会議における発表)

日時：令和5年7月5日(水)
13:00～17:30

会場：文部科学省講堂
参加者：約200名

今年の4月から施行されている改正博物館法では、「博物館は…資料の相互貸借、職員の交流、刊行物及び情報の交換その他の活動を通じ、相互に連携を図りながら協力するよう努めるものとする」(第3条)とされ、初めて「連携」という文言が条文に明記されました。

また、文化庁の博物館総合サイトでも次のように方向性が示されています。「全国の博物館が、時代の要請や環境の変化に取り残されることなく発展していくためには、博物館が互いのノウハウやリソースを共有し合うネットワークを形成することで、小規模な館でも効率的・効果的に新たな課題に対応することができる環境を作っていくことが求められます。新しい制度では、登録博物館が互いの連携や指定施設との連携に努めるものと定めることで、こうしたネットワークづくりを促進します。」

(<https://museum.bunka.go.jp/law/>)



このような背景のもと、毎年開催される全国博物館長会議(主催:文化庁・公益財団法人日本博物館協会)では、博物館連携が一つのテーマに位置付けられました。そこで全国的にみて活発な活動を続けている岐阜県博物館協会に依頼があり、事例として報告する機会を得ました。発表では、協会創立50周年の翌年2017年に発足した新組織である、専門部会(もの部会、ひと部会、こと



部会)と5つの地域ブロック部会、全体調整の企画委員会それぞれのめざすところと活動の様子を紹介しました。そして現在の課題として、活動が参加メンバーの自発的熱意に頼っているため時に負担や不安定になることがあること、協会の活動が地域や自館の活動にどのような影響を及ぼしているのかを考える必要があること、などを話しました。

最近では、協会の特に現場レベルで顔見知りの関係が生まれ、枠にとらわれない自由な活動がだんだんと充実し広がりを持ちつつあると感じます。協会という場をとおして築かれた信頼・連携関係が、自館だけで気づけなかった活動のヒントを発見する刺激やきっかけとなり、各方面での活性化に繋げていけたらいいなど、発表を通して感じることができました。

(企画委員会・美濃加茂市民ミュージアム 可児光生)

博物館協会インフォメーション

機関紙の原稿執筆について

昨年度末に本紙の原稿執筆要項を改定し、今回、土岐市美濃陶磁歴史館における調査研究を掲載することとしました。今後も、各会員の「研究報告」「実践報告」を掲載し、様々な活動を広く報告紹介をしていきます。各会員の方からの投稿をお待ちしております。

岐阜の博物館 News Letter No.193

編集：岐阜県博物館協会「こと部会」

発行：岐阜県博物館協会

事務局：〒501-3941 関市小屋名1989(岐阜県博物館内)

(電話)0575-28-3111 (FAX)0575-28-3110

(URL)<https://www.gifu-museum.jp/>